

# 反日歴史認識の起源

炎天のこの季節になると、少年の時代に経験した米軍による空襲の恐怖のことが思い起こされる。日本はポツダム宣言を受諾して敗戦国となり、GHQによる占領が始まった。日本は戦争を引き起こして自国民と周辺諸国民を惨たる状況に貶めた犯罪国家だとされ、深い罪悪感に人々は身の置き所のない感覺を抱かされつづけた。『ウォーギルト・インフォメーション・プログラム』といわれた一大プロパガンダである。フィリピンにおける日本軍の「暴虐」や南京事件などの「蛮行」が繰り返され報道された。日本が統治していた朝鮮もまた米軍の軍政に組み込まれ、これは一九四八年八月十五日の大韓民国政府の樹立までつづいた。米軍は朝鮮を日本の植民地支配から救出した解放軍であり、その米国が繰り返す日本の悪行の数々が朝鮮人の日本憎悪をかき立て、彼らの対日歴史認識に大きな影響を与えたのである。このことを私は荒木信子著『韓国の「反日歴史認識」はどのように生まれたか』（草思社）によって教えられた。

渡辺利夫（公益財団法人オイスカ会長）

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任（二〇一〇年十二月、退任。二〇一七年六月より現職）。

この著作は、終戦直後の一九四五年八月十五日から朝鮮戦争が勃発した一九五〇年六月二十五日までの韓国の新聞二二紙の全ページを検索し、反日歴史認識の起源を探るといふ並大抵ではないエネルギーを注いで描かれている。この間に韓国で日本がどのように語られていたのか、論点はもちろん複雑にして多岐に及ぶものの、朝鮮を支配したものが解放軍たる米国であったがゆえに、その日本糾弾のありようが韓国の対日認識に絶大な影響を与えたという論点に、私は強く惹かれた。

「米国は、第二次大戦後、日本と朝鮮に進駐し占領下においた。彼らが日本人に戦争の意識を植えつけ、日本の諸制度の改変を行ったことが、逐次朝鮮・韓国の紙面でも報じられた。一九四五年九月中旬に戦争犯罪のニュースが日本紙に掲載されはじめると、韓国でも同様の記事が載りはじめた」と記され、この事実を確かな事実として確認できたことが本研究の最大の収穫であったと著者自身が述懐している。確かに貴重な収穫に違いない。